

年少者及び成人学習者を対象としたプログラマ ティックス指導とその効果

石原, 紀子 / ISHIHARA, Noriko

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2015-04

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 24 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520657

研究課題名(和文) 年少者及び成人学習者を対象としたプラグマティクス指導とその効果

研究課題名(英文) Pragmatics instruction and its effects on young and adult learners of English

研究代表者

石原 紀子 (Ishihara, Noriko)

法政大学・経営学部・准教授

研究者番号：90523126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：年少者のプラグマティクス能力の発達について行った研究では、ストーリー・テリングやビジュアル・ナラティブを用いた対話を通じたプラグマティクス指導により、プラグマティクス能力の向上が可能であることがわかった。また成人の学習者のプラグマティクス能力の発達については、これまでに例の少ない長期的研究をもって質的に学習者の学びを検証した。プラグマティクス能力の発達の複雑な特性、特に学習者のアイデンティティの変化とプラグマティクス能力や意識との関連、また協働的対話によって深まる語用論的多様性の理解、そして教室内外の学習言語使用による語用論的ことばの使い方の向上の過程などが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Pragmatic instruction for young learners using visual narratives showed enhanced pragmatic competence on the part of the younger learners aged 5-12. Examples of their pragmatic development included raised pragmatic awareness and improved use of the speech act of requests facilitated through story-telling and co-constructed dialogues. In addition, pragmatic development of adult learners was explored through qualitative longitudinal studies in which telecollaboration through blogging supported their pragmatic learning. The complex nature of the learners' pragmatic development was revealed, such as interconnectedness between the learners' subjectivities and pragmatic awareness. Learners also cultivated a deeper understanding of genre-based pragmatic variation through collaborative dialogues and improved pragmatic L2 use in and outside of the classroom.

研究分野：外国語教育

キーワード：プラグマティクス指導 語用論的指導 教員養成 教師教育 ストーリー・テリング 小学校の英語教育 中間言語語用論

1. 研究開始当初の背景

プラグマティクス能力とは、文法や語彙の基礎知識のみならず、状況や対人関係をわきまえた待遇表現やポライトネスを適用できる能力、つまり文化的知識や社会規範の認識などを踏まえた重要な能力である。言語運用能力の不可欠な構成要素であるプラグマティクス能力(語用論的能力)は、教室内指導により向上可能であることが1990年代より実証されている。しかしプラグマティクス能力を向上させる指導は、現在の語学指導に十分に採り入れておらず、採り入れられている場合でも、成人学習者のみを対象にしており年少者のプラグマティクス能力の発達に関してはほとんど明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究では小学生を対象に、たとえば紙芝居などのストーリー・テリングの手法を用いて英語のプラグマティクスを指導しその効果を検証する。さらに成人学習者(大学生以上)にも、語学の授業にてプラグマティクス指導を採り入れ、社会文化的にふさわしい言語の学習、多文化理解、社会文化的多様性の受容などを奨励し、その効果を検証する。

3. 研究の方法

研究はエスノグラフィーと談話分析とを用いた質的手法で、学習者同士やプラグマティクス指導者との対話、学習者のプラグマティクス意識・言語の使い方、指導者の認識などを検証するためのデータを収集した。学習者の認知的発達を解釈する理論的枠組みとしてはヴィゴツキーの社会文化理論(Vygotsky, 1978, Lantolf & Thorne, 2006)を用い、学習者同士の意見交換や指導者との学習を媒介する対話の中に認知的発達の過程がどの様に現れ発達していくかを描写的に検証した。

4. 研究成果

(1) 年少者(小学生)のプラグマティクス能力の発達について行った小規模のパイロット研究では、120 - 180時間の指導でも、学習者のプラグマティクス能力を

向上させることが可能であったことが明らかになった。ストーリー・テリングの手法を用いたビジュアル・ナラティブを通し、学習者同士や指導者との対話を通じたプラグマティクス指導により、学習者のプラグマティクス意識が向上し、学習者とその意識を自発的に新たな場面に応用することができた。一方、語用論的ことばの使い方については、このような短時間の指導では、学習者の習熟度や、指導の目的によって限界が生じることがあるようである。たとえば、学習者が、日本に居住しこれまで英語を学習したことがない小学3年生を含んでいた場合は、語用論的意識の向上を目指した120時間の指導では、語用論的ことばの使い方の向上は極わずかであった。香港に在住し英語の学習歴がある12歳の小学生を含んでいる場合には、語用論的ことばの使い方により顕著な向上が見られた。年少の学習者に対するプラグマティクス指導に関しては、これまで研究が国内外でほとんどないため、今後のこの分野を質的に研究する上で基礎研究となり得る。

- (2) 上記の年少者のプラグマティクス能力の発達についての研究は、Teacher-based assessmentの手法を用いて行われたが、プラグマティクス指導の目覚ましい発展に比べ、プラグマティクス能力の評価について、特に教室内評価については、これまでほとんど研究がなかった。上で述べた年少の学習者を対象とした研究に加え、アメリカ東部での日本語学習者を対象にTeacher-based assessmentによって学習者の語用論的学びを検証した研究では、教員とのインタラクションにより、学習者が日本語の語用論的規範や語用論的多様性に対する理解を徐々に深めていった学習過程が明らかになった。この指導では、5つの発話行為と敬語の使い方が指導されたが、日本語での断りの場合に焦点を当て学習者の学びを例証した。
- (3) 成人の学習者のプラグマティクス能力の発達については、これまでに例の少ない長期的研究をもって質的に学習者の学びを検証した。これまで、プラグマティクス能力は、量的手段によって短期的に計測されることが多かったため、このような長期に渡る質的研究により、プラグマティクス能力の発達の複雑な特性、特に学習者のアイデンティティーの変化とプラグマティクス能力や意識との関連、また協同的対話によって深まる語用論的多様性の理解、そして教室内外の学習言語使用による語用論的ことばの使い方への向上の過程などが新たに明らかになったと言える。アメリカにおける日本語学習者と日本における英語学習者との交

流をブログを用いて奨励し、プラグマティックス指導を行った研究では、呼称・性別によって使い分けられることがある終助詞・方言・絵文字・「です・ます」と「だ・である」のスタイルシフト、発話行為などにおける学習者のプラグマティックス能力の発達が見られた。このような教室内データを扱った研究は、指導現場への示唆に富んでおり、教員養成指導にも生かせるものである。

- (4) 語用論的ことばの使い方に関する既存研究が、語学の教科書などの教材にどの程度生かされているかという教材評価も行った。従来のこのような研究では、語用論的ことばの使い方に関する知見が、教材には反映されていない実態を明らかにするとどまるものが多いが、今回の論文では、近年のどのような出版物に、実証研究に基づいたプラグマティックス指導に関する指導案が見られるか、そしてその指導案を個々の教員がどのように改訂し、より高い効果につなげるかまで述べた。プラグマティックス指導に興味のある語学教員が、指導を向上させるための参考となる実践的研究である。
- (5) プラグマティックス指導を教員養成にも採り入れ、教員のプロフェッショナル・ディベロップメントを奨励する試みも行った。教員同士、あるいは教員養成指導者との対話を通して、教員は母語話者至上主義から脱却した国際語としての英語の語用論的規範をどのように捉えるかという批判的視点と向き合い、協働的に構築する異文化間理解や意味の交渉について学んだり、ナラティブを用いて教員が自らの異文化体験を見直し省察を深めたりした。このようなプロフェッショナル・ディベロップメントの機会により、研究に参加した数人の教員は、語用論的多様性の理解を深め、ナラティブを利用したプラグマティックス指導を考案した。このような活動を通し、教員は自らの指導に関する信条や知識を明確化し、語用論的ことばの使い方や異文化間コミュニケーションに関する理解を深めることとなった。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. Ishihara, N., & Chiba, A. (2014). Teacher-based or interactional?: Exploring assessments for children's pragmatic development. Iranian Journal of Language

Testing, 4(1), 84-112.

<http://ijlt.ir/journal/index.php/archives/86-vol-4-no-1-march-2014> 査読有

2. Ishihara, N. (2013). Is it rude language?: Children learning pragmatics through visual narratives. TESL Canada Journal, 30(3), 135-149.
<http://teslcanadajournal.ca/index.php/tesl/article/view/1157> 査読有
3. Ishihara, N. (2012). Critical narratives for teaching pragmatics: Application to teacher education. The European Journal of Applied Linguistics and TEFL(2), 5-17.
http://theuropeanjournal.eu/download/EJAL-TEFL_02_2012.pdf 査読有
4. Ishihara, N. (2012). Incorporating a critical approach to teaching pragmatics: A story-based approach. International Journal of Innovation in English Language Teaching & Research (IJIELTR), 1(1), 29-36.
https://www.novapublishers.com/catalog/product_info.php?products_id=26540 査読無

〔学会発表〕(計11件)

1. Ishihara, N., & Chiba, A. (2015年3月22日). Teacher-based or interactional?: Exploring the assessment instruments for children's L2 pragmatic development. Paper presented at the Annual Conference of American Association for Applied Linguistics, Toronto, Canada.
2. Ishihara, N. (2015年3月15日). Assessing materials to teach pragmatics: Resources to teach how to be culturally appropriate. 神田外語大学公開講演 神田外語大学 東京都千代田区
3. Ishihara, N. (2014年11月21日). A marriage of peace linguistics and pragmatics. Paper presented at the Annual Conference of the Japan Association for Language Teaching

- (JALT), つくば国際会議場 茨城県つくば市
4. Ishihara, N., & Takamiya, Y. (2014年3月22日). Learning pragmatics through blogging: An ethnographic study of telecollaboration. Paper presented at the Annual Conference of American Association for Applied Linguistics, Portland, USA.
 5. Ishihara, N. (2013年10月27日). Applying politeness theory in the classroom. Joint panel with Jack Barrow and Kimiko Kosei presented at the Annual Conference of Japan Association for Language Teaching (JALT). 神戸国際展示場 兵庫県神戸市
 6. Ishihara, N. (2013年3月25日). Learning and teaching the pragmatics of English and other languages: Towards enhanced intercultural understanding. Invited lecture at La Sapienza (the University of Rome), Rome, Italy.
 7. Ishihara, N. (2012年10月20日). Teacher-based assessment of young learners' pragmatic competence. Poster presented at the Second Language Research Forum (SLRF), Pittsburg, USA.
 8. Ishihara, N. (2012年10月14日). How do children learn pragmatics? Poster presented at the Annual Conference of Japan Association for Language Teaching (JALT). アクティシティ浜松 静岡県浜松市
 9. Ishihara, N. (2012年7月30日). Enhancing Learners' Cross-Cultural Communication Skills: L2 Pragmatics for All Ages 異文化間コミュニケーション能力・語用論的能力の向上：様々な年齢に適切な指導に向けて。Paper presented at the Hokkaido JALT. 北海学園、北海道札幌市
 10. Ishihara, N., Asaba, M., Burke, M., Chiba, A., & Mboutsiadis, B. (2012年6月17日). Visual narratives for L2 pragmatic learning: Sociocultural literacy development. A panel presented at the JALT Pan SIG Conference. 広島大学 広島県東広島市
 11. Ishihara, N. (2012年6月2日). "Teacher, you should get married this year": Addressing pragmatics in the language classroom. Keynote speech presented at the Practical Ideas for English Teaching (PIE) Conference. 関東国際高校 東京都新宿区
- 〔図書〕(計10件)
1. Ishihara, N. (編著) & Cohen, A. (著). (2015). 多文化理解の語学教育 語用論的指導への招待 (共著 Ishihara & Cohen, 2010, Teaching and learning pragmatics: Where language and culture meetの抄訳・増補改訂) 研究社(総300ページ, すべて研究代表者による抄訳・増補改訂であるが、原著に基づき単著部分12-23, 104-202, 231-263, 268-300; 共著部分 iii-vii, 24-102, 204-215, 264-267)
 2. Ishihara, N., & Takamiya, Y. (2014). Pragmatic development through blogs: A longitudinal study of telecollaboration and language socialization. In S. Li & P. Swanson (Eds.), Engaging language learners through technology integration: Theory, applications, and outcomes. Hershey, PA: IGI Global. (総368ページ, 共著担当部分 137 - 161)
 3. Ishihara, N. (2013). Teacher-based assessment of L2 Japanese pragmatics: Classroom applications. In S. Ross & G. Kasper (Eds.), Assessing second language pragmatics (pp. 124-148). Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan. (総366ページ, 担当部分124-148)
 4. Takamiya, Y., & Ishihara, N. (2013). Blogging: Cross-cultural interaction for pragmatic development. In N. Taguchi & J.

- Sykes (Eds.), Technology in interlanguage pragmatics research and teaching. Philadelphia, PA: John Benjamins. (総276 ページ、担当部分185-214)
5. 石原紀子. (2013). 語用論的能力の発達 [Pragmatic development]. In 『第二言語習得と英語科教育法』 [Research in second language acquisition and English teaching methodology] JACET SLA研究会 東京 Tokyo: 開拓社. (総385ページ、担当部分 92-104)
6. Cohen, A., & Ishihara, N. (2013). Pragmatics. In B. Tomlinson (Ed.), Applied linguistics and materials development. London: Bloomsbury. (総335ページ、共著担当部分113-126)
7. Ishihara, N. (2012). Moving from North America to overseas. In R. Kubota & Y. Sun (Eds.), Demystifying career after graduate school: A guide for second language professionals in higher education. Charlotte, NC: Information Age Publishing. (総223ページ、担当部分77-87)
8. Ishihara, N. (近刊). Softening or intensifying your language in oppositional talk: Disagreeing agreeably or defiantly. In P. Friedrich (Ed.), English for Diplomatic Purposes. Clevedon: Multilingual Matters. (総ページ数不明)
9. Ishihara, N., & Paller, D. L. (近刊). Research-informed materials for teaching pragmatics: The case of agreement and disagreement in English. In B. Tomlinson (Ed.), SLA research and materials development for language learning. London: Routledge. (総ページ数不明)
10. Ishihara, N. (近刊). Intercultural pragmatic failure. In J. Lontas et al. (Eds.), The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching. Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.

(総ページ数不明)

6 . 研究組織
(1)研究代表者
石原紀子 (Ishihara, Noriko)
法政大学・経営学部・准教授
研究者番号：90523126